『古代アメリカ』19, 2016, pp.63-75

＜調査研究速報＞

補修される土器／補修されない土器

―アンデス形成期パコパンパ遺跡、カピーヤ遺跡の事例―

中川渚
（総合研究大学院大学）
関雄二
（国立民族学博物館）
ダニエル・モラーレス
（ペルー国立サン・マルコス大学）

１．はじめに

近年アンデス考古学では遺物や遺構の分析の視点が大きく変化し、土器の研究に関しても製作技術や廃棄パターンから、その背後の行為に迫ろうとするものが増加してきている［松本 2013; Roddick 2009 など］。しかしこのような状況の中で、土器の補修行為に目が向けられることはほとんどない。アンデス考古学では、先史時代の土器の補修に関する論考は皆無であり、散発的に補修孔を持つ土器片の例が報告されるのみに留まっている［松本 2013:16; 鶴見 1998:22 など］(註1)。一方でアンデス以外の地域では、技術的な視点からの研究だけでなく、補修の選択行為にまで目を向けた研究がいくつか見られ、どのような土器を補修しどのような土器を補修しないのかという選択が、当該社会集団の価値観や用途などと関連する可能性が指摘されている。本論では土器の補修に関する研究を概観した上で、ペルー北部山地のパコパンパ遺跡およびカピーヤ遺跡から出土した補修孔を持つ土器の分析結果を提示し、補修される土器／補修されない土器がこの地域ではどのように選択されていたのか、現段階での見通しを示す。

２．先行研究

先史時代の補修孔に関する報告事例は、ヨーロッパ、アメリカ、日本など世界各地で見られるが、まとまった研究は限られているのが現状である。古代ローマなど金属留め具を使っていた地域では、補修孔だけでなく留め具が残存しているケースが多く、金属加工技術の研究と関連して補修に関する先行研究も若干多く見られるが［Elston 1990; South 1968 など］、それ以外の地域では補修の痕跡が穿孔のみの場合が多く、穴どうしを有機物の紐などで縛るという比較的単純な技術が想定されるためか、それ以上の関心が持たれにくいようである。しかしそれでも、補修の分析に積極的に取り組んだ研究がいくつか挙げられる。以下ではそれらを概観した上で、補修される土器／補修されない土器の選択やそれらの要因がどのように論じられているかを示す。

日本考古学では、及川良彦が『総覧　縄文土器』に土器の補修・穿孔と題して先行研究をまとめており［及川 2008］、補修孔の形状から穿孔具について具体的に考察したものや［杉原・芹沢 1957］、紐綴じだけでなく接着剤を併用した補修の方法［菅谷 1984］など複数の研究を挙げている。及川自身もヒビ割れの形状や補修方法、接着剤の分類を試みた上で、補修の目的と補修方法の関連性について示唆している(註2)［及川 2008:1024］。また、先述のように補修孔を持つ土器片の報告だけ見ればその例は数多くあり、保存状態の恵まれた鳥浜貝塚のように、補修孔に紐が貫通している状態の土器片が出土することもある［鳥浜貝塚研究グループ 1979 など］。

これらの技術的な視点からの研究以外にも、補修される土器／補修されない土器の区別についての言及がしばしば見られる。たとえば小林達雄は縄文土器の例を挙げ、様式(註3)によって補修孔が全くないかまれな場合や、一様式内でも補修されるのが粗製土器のみの場合があるなど、「一様式内において、補修孔で手当てしながらも使用し続ける土器と、多少とも破損した土器は機能を失ったものとされる型式などの別があったかもしれない」と指摘している［小林 1977］。また、2008 年の古代ギリシャ・ローマの土器に関する国際フォーラムでは補修にも光が当てられており、その報告論文集の序文に「詳細な補修方法は民族性を示している可能性があり、このような行為に目を向けることで土器の背後の人々への理解が一層深まる」（筆者訳）との言及がある［Lawall and Lund 2011:9］。

さらに補修される土器／補修されない土器の選択に関して、正面から取り組んだ研究をいくつか挙げることができる。ロサムンド・クレアルはイギリス南部、後期新石器時代の補修される土器／補修されない土器の違いについて分析し、特定の土器伝統にはより高い割合で現れるという結果を得た［Cleal 1988］。そしてその違いを生じさせる要因として、土器作りに適さない時期や原材料の入手が困難な時期に、手持ちの土器でしのぐために補修行為が活発化するという可能性や、投下労働力の高い土器ほど補修して使われ続ける可能性などを挙げている［Cleal 1988:141-143］。しかし広域のデータを一様に考察しているために決定的な要因がつかめず、結論には至っていない。これらの要因のうちどれが重要視されていたのかは、集団ごとに異なる可能性が考えられる。

グルエーヤ・ビルデとハンドバーグの研究はこの点を乗り越えており、古代ギリシャの補修孔を持つ土器を分析して、時期や地域によって補修される土器の器形や割合が異なるとの結果を得ている［Guldager Bilde and Handberg 2012］。そしてその要因について、それぞれ象徴的価値や経済的な状況などが関連していると考察している［Guldager Bilde and Handberg 2012:473-477］。補修行為の選択要因でいえば、ルイーズ・シニアは現代メキシコと先史南西アメリカの補修される土器／補修されない土器の分析を通じ、価値が高いとみなされる土器が補修されると結論付けており［Senior 1995］、別の古代ギリシャ・ローマの研究でも、価値が高い土器が補修されるとの考察が見られる［Dooijes and Nieuwenhuyse 2007, 2009］。一方で日本考古学では、縄文晩期、青森県宇鉄遺跡の補修される土器／補修されない土器の器種の差が、その用途によるものであり、液体を入れて使う器種は補修されないとするものがある［藤村 1984］。

以上のように、先行研究からは土器様式や土器伝統、器形、そして時期や地域によっても補修される土器と補修されない土器の区別があるとの結果が得られている。そしてこの違いを生じさせる要因として、土器作りシーズンや価値体系、経済的状況、用途差が挙げられている。

３．パコパンパ遺跡

パコパンパ遺跡はペルー共和国、カハマルカ州のアンデス山中に位置する。同遺跡の主な利用時期は形成期

中期から形成期後期（紀元前1800年～紀元前500年）であるが、その後のカハマルカ文化の儀礼的再利用の痕跡も認められている。1939年にラルコ・オイレが調査を行い[註4]、その後フーリオ・C・テーヨが、当時形成期研究の問題の中心であったチャビン文化の特徴を複数持つ遺跡であると言及した［Tello 1960:24, 30, 33, 37］ことで関心はさらに高まり、複数の考古学者によって断続的に調査がされてきた［Fung 1975; Morales 1980; Rosas and Shady 1970など］。2005年に国立民族学博物館とペルー国立サン・マルコス大学による共同調査プロジェクトが開始され、現在に至るまで発掘調査が継続して行われている。大規模で継続的な発掘調査の結果、パコパンパI期（紀元前1200年～紀元前800年）、パコパンパII期（紀元前800年～紀元前500年）の時期区分や、この2時期にわたる建築活動の変遷、遺跡内での工芸品製作活動、リャマの埋葬等動物と関連した儀礼などが明らかになってきている［Seki 2014など］。

以上のように、パコパンパ遺跡はペルー考古学史上重要視されてきた遺跡であり、他遺跡との図像様式や土器の類似性から地域間関係についても言及されてきた。しかし様式の類似や相違に目を向けた分析だけでは、「関係があったのか、なかったのか」という単純な二項対立的な議論に陥ってしまう危険性がある。一方で補修に関する違いが明らかになれば、土器の扱い方や認識の違いなどの社会的脈絡を含めた考察ができる可能性がある。

４．パコパンパ遺跡より出土した補修孔を持つ土器

補修行為は使用後に破損することによって起こりうる行為である。つまり土器の焼成後に開けられた穴がまず補修孔の候補となる[註5]。土器の焼成後に開けられた穴としては、補修のための穿孔のほかに紡錘車への転用のためのものがあるが、紡錘車への転用には主に壺の底部が用いられており、穿孔される場所もある程度割れ口から離れていることから区別が可能である。したがって焼成後に穿孔されており、かつ穴が割れ口から近いものを補修孔として分析した。また穿孔を伴う補修行為には、亀裂が生じた破片を補修する場合と、完全に分離した状態の破片を補修する場合が考えられ、特に完全に分離した場合、補修孔を複数開けた上で紐綴じしたと想定される。しかしパコパンパ遺跡でこれまでに確認されているものは、二次堆積のコンテクストによるため総じて破片が小さく、補修されて使われた後二次堆積に至る過程でさらに破損したと考えられる。そのため、本来どちらであったかを見極めるのは困難であり、亀裂・分離を問わず単独破片で補修孔が一つであっても補修行為の痕跡として分析対象に含めた。これまでにパコパンパ遺跡では、パコパンパI期9点、パコパンパII期22点の計31点の補修孔を持つ土器が確認されている[註6]（図1）。少ないサンプル数ではあるが、これらの土器片を、タイプ、器形、時期、穿孔方向などの技術的要素によってそれらの関連性で分析し、現段階での見通しを示したい。なお、パコパンパ遺跡では、土器のタイプは技術的な組み合わせ、時期的な指標、他地域との比較可能性の3点に重点を置き、色、表面調整、装飾要素の属性を基準に作成した分類体系によって設定している[註7]。以下にまずおおよそのタイプの特徴を述べる[註8]。

【パコパンパI期】

PCI Alisado：表面が平滑化されている土器。地の色は褐色、黒、赤の場合がある。赤の場合はスリップがかけられるが、基本的に装飾はされない。

PCI Rojo Pintado：表面が平滑化されており、口縁部に赤色塗彩がされる土器。

PCI Pulido：表面が鈍く光る程度に磨かれた土器。地の色は黒、赤、ごくまれに褐色の場合がある。赤の場合はスリップがかけられるが、それ以外の装飾はされない。

PCI Inciso Tosco：刻線で区画した範囲内に、同様の刻線で図像や幾何文が描かれる土器。刻線は粘土が軟らかいうちに引かれる。焼成後、刻線内に顔料が充填されるものもある。地の色は黒、赤（スリップ）、まれに褐色の場合がある。

PCI Inciso Fino：細く浅い刻線で図像や幾何文が描かれる土器。焼成後、刻線内に顔料が充填されるものもある。地の色は黒、赤（スリップ）の場合がある。

PCI Inciso Ancho：刻線で幾何文が描かれる土器。文様帯の区画はされない。地の色は赤（スリップ）、黒の場合がある。

PCI Blanco Pintado：白の顔料で塗彩された土器。刻線で幾何文が描かれる場合もある。

PCI Rojo y Blanco：赤と白の顔料で塗彩された土器。刻線で幾何文が描かれる場合もある。

PCI Pintado Post-cocción en Zona：刻線で区画された範囲に、焼成後、赤や黄、白、ごくまれに緑の顔料で塗彩される土器。この区画範囲内に同様の刻線で図像や幾何文が描かれる。

PCI Polícromo：焼成前に赤や赤紫、橙、白の顔料で塗彩される土器。刻線で塗彩範囲が区切られたり幾何文が描かれたりするが、刻線が引かれないものもある。

【パコパンパII期】

PCII Alisado：土器表面が平滑化されている土器。地の色は褐色、黒、白、赤、薄い赤の場合がある。赤および薄い赤の場合はスリップがかけられる。装飾はされないか、表側に貼付文などの比較的単純な装飾がされる。

PCII Tosco：土器表面が平滑化されているが、ハケ目や調整痕が残っている土器。地の色は褐色、黒、白、赤、薄い赤の場合がある。赤および薄い赤の場合はスリップがかけられる。装飾はされないか、表側に貼付文などの比較的単純な装飾がされる。

PCII Rojo Pintado：表面が平滑化されており、口縁部に赤色塗彩がされる土器。

PCII Pulido：表面が磨かれた土器。地の色は黒、赤（スリップ）、白、まれに褐色の場合がある。代表的な装飾は刻線やスタンプでつけた円文、圏点文、二重円文である。そのほか、刻線やスタンプ、ロッカースタンプ、刺突、モデリングなどを組み合わせて、ヘビの図像やサボテンなどが表現される場合もある。焼成後、刻線内に顔料が充填されるものもある。また、装飾がない場合もある。

PCII Inciso Fino：細い刻線で、鉢の口縁部下に水平に、幾何文が連続的に描かれる土器。刻線は粘土が非常に乾いた状態で引かれる。地の色は赤（濃いスリップもしくは顔料）とごくまれに黒の場合がある。

PCII Línea Bruñida：平滑面と磨研面のコントラストを用いて、鉢の内側に文様が描かれる土器。口縁部を磨いた上で、内側全体を使って磨かれた線で幾何文が描かれる。地の色は黒か褐色、まれに赤の場合がある。

PCII Máscara：浮き彫り、幅の広い刻線、削り取り、刺突などを組み合わせて、神官や神格化された動物などが表される土器。

Rojo sobre Anaranjado：橙の地に赤色顔料で塗彩もしくは文様が描かれる土器。胎土が非常に緻密であり、搬入土器と考えられるが、在地で製作されたと考えられる異なる胎土を持つものもある。

Gris Pulido：表面が磨かれた土器。地の色は灰色から黒。PCII Pulido と装飾要素は同様であるが、胎土が非常に緻密であり、搬入土器と考えられる。



図 1 パコパンパ遺跡より出土した補修孔を持つ土器片（左：パコパンパⅠ期、右：パコパンパII期）

4-1. 補修技術に関する分析

基本的な穿孔技術について、器壁厚、穿孔径、穿孔方向、割れ口からの距離のデータをとり、各時期における相関関係を分析した。なお、いずれの破片にも接着剤の痕跡は認められていない。

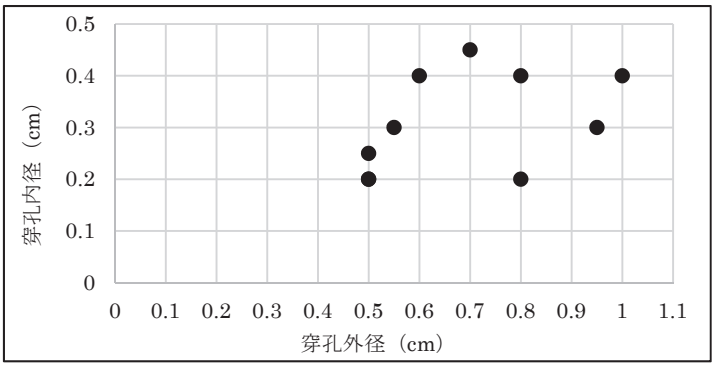


図 2 補修孔の径の差（パコパンパⅠ期）

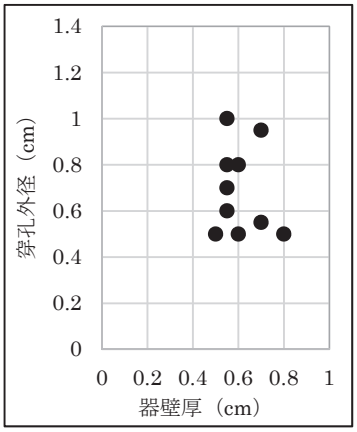


図 3 器壁厚と補修孔径（パコパンパⅠ期）

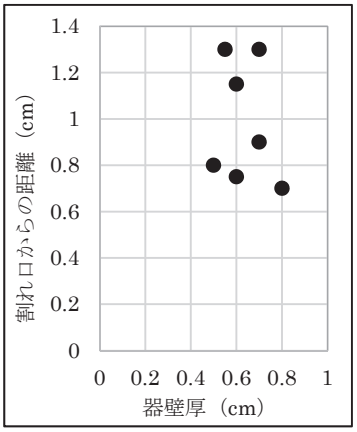


図 4 器壁厚と割れ口からの距離（パコパンパⅠ期）

パコパンパ I 期では器壁厚が 0.5～0.8cm、穿孔径は 0.5～1.0cm であり、割れ口からの距離は 0.8～1.15cm であった。穴の終着点となる穿孔の内径は 0.2～0.45cm で、穴の出発点（表からの穿孔の場合は表側、両面からの場合は土器表面）と終着点（表からの穿孔の場合は裏側、両面からの場合は断面内側）の大きさの違いが見られることから、穿孔具は針のように細長い形状ではなく、錐体だったと考えられる（図 2）。器壁厚、穿孔径、割れ口からの距離にはばらつきがあり、サンプル数の少なさも起因して相関関係を見出すことは難しい（図 3、4）。穿孔方向は表からと両面からの場合があり、特にタイプや器形との関連性は見られなかった。また器壁厚との関連性も見出せず、穿孔方向の選択は、硬さと関連する可能性が考えられる。審美的な観点からは表側から見える穴の大きさは小さいほうがよく、その場合裏側からの穿孔が選択されると考えられるが、裏側からの穿孔はみられず、かつ文様帯を避けることなく穿孔されることから（図 1 左）、審美的要因は重視されなかったと推察される。

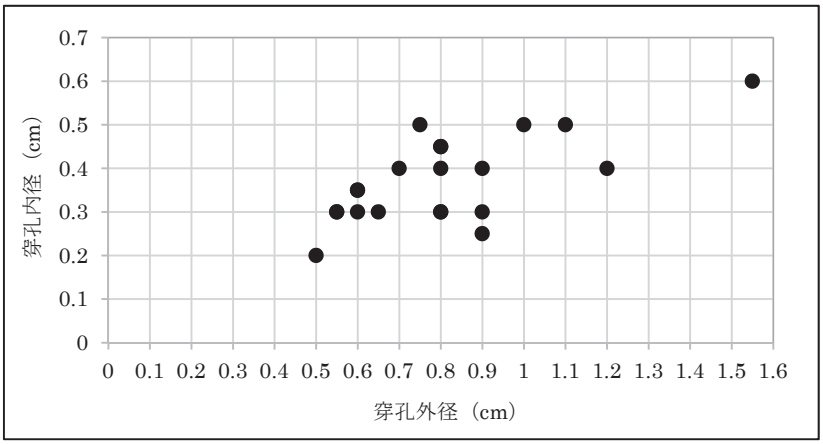


図 5 補修孔の径の差（パコパンパ II 期）

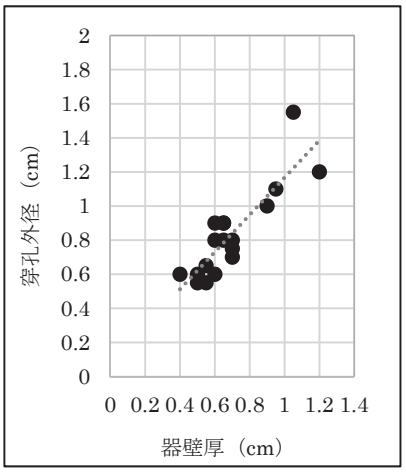


図 6 器壁厚と補修孔径（パコパンパ II 期）

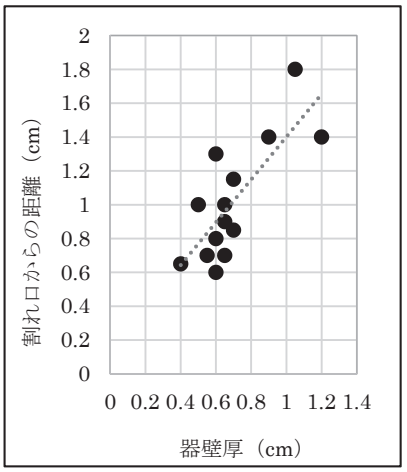


図 7 器壁厚と割れ口からの距離（パコパンパ II 期）

パコパンパII期では、器壁厚が0.5〜1.2cmで穿孔径は0.5〜1.55cmであり、割れ口からの距離は0.7〜1.4cmであった。穿孔内径は0.2〜0.6cmで外径と内径の大きさの違いが顕著であり、パコパンパI期同様、錐体の穿孔具を用いたと考えられる（図5）。パコパンパII期には大型で厚手の器形が現れるため、器壁厚の数値の幅がパコパンパI期よりも大きく、器壁が厚ければ径が大きくなり、割れ口からの距離も大きくなるとの相関関係が見られた（図6、7）。穿孔方向は表からと両面からの場合があり、タイプや器形との関連性は見られない。穿孔方向と器壁厚との関連性として、0.9cm以上の厚さの土器は必ず両面から穿孔されることが挙げられるが、0.4cmの厚さであっても両面から穿孔される場合があり、厚さだけでなく硬さとの関連性も考えられる。穿孔は文様帯を避けることなく行われており（図1右）、パコパンパII期でも審美的な要因は重視されなかったと考えられる。

4-2. タイプ・器形と補修される土器の関連性

次に、補修されるタイプ・器形との関連性について時期ごとに見て行きたい。表面が磨かれるものや図像が表現されるもの、複数の装飾技法が組み合わされるものは投下労働力が高く、本論ではこれらを精製土器とし、それ以外のものを粗製土器とする。パコパンパI期ではPCI Alisado、PCI Rojo Pintadoが粗製土器に該当し、それ以外はすべて精製土器であるが、この区分上で補修の有無の区別は見られなかった（表1）。一方で精製土器の中でも、PCI Inciso Fino、PCI Blanco Pintado、PCI Pintado Post-cocción (註9)、PCI Polícromoには補修孔が見られない。器形で見ると、パコパンパI期では鉢、短頸壺に補修孔が見られ、無頸壺、ボトルでは確認されていない。鉢の中でも外傾鉢が多いのは、この時期につくられた鉢器形のほとんどが外傾鉢であることと関連していると考えられる (註10)。鉢全体では7点、壺全体で2点の補修が確認されているが、可搬性の高い鉢は破損する機会も多く、この量の違いは破損する機会の違いに起因している可能性がある。一方でボトルは鉢と同様に可搬性が高いものの補修孔が確認されておらず、扱われ方の違いについても考慮する必要がある。

		粗製土器		精製土器								器形計
		PCI Alisado	PCI Rojo Pintado	PCI Pulido	PCI Inciso Tosco	PCI Inciso Fino	PCI Inciso Ancho	PCI Blanco Pintado	PCI Rojo y Blanco	PCI Pintado Post-Cocción	PCI Polícromo	
鉢	外傾鉢	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
	外反鉢	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	半球形鉢	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	開口半球形鉢	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	その他鉢	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
壺	短頸壺	0	0	1	0	−	0	0	1	0	0	2
	無頸壺	0	−	−	−	−	−	−	0	−	−	0
ボトル	ボトル	−	−	0	−	0	−	−	−	−	−	0
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
タイプ計		5	0	1	2	0	0	0	1	0	0	9

表1 パコパンパI期の補修孔を持つ土器（「−」は該当するタイプ／器形が存在しないもの）

パコパンパII期の土器は、PCII Alisado、PCII Tosco、PCII Rojo Alisadoが粗製土器、それ以外は精製土器であるが、粗製・精製に関わらずほぼ全てのタイプが補修される。補修されないタイプはPCII Máscara、Gris Pulido、Rojo sobre Anaranjadoである。PCII Máscaraは先述のとおり、浮き彫りなどの技術を用いて神官や神格化された動物などを表すもので、特に儀礼遺構から多く出土しており、精製土器の中でも特徴的な機能を有していたと

考えられるタイプである。また、Gris Pulido、Rojo sobre Anaranjado は胎土の違いから搬入品と想定されるタイプである。器形でみると、外傾鉢、開口半球形鉢、短頸壺には補修行為が見られ、パコパンパ I 期同様無頸壺の補修孔は確認されていない。外湾平底鉢、朝顔鉢、水差し形土器はパコパンパ II 期になって現れ、特に墓に埋納されることもある器形である。これらの器形には補修孔が見られず、同じ鉢や壺でも扱いが異なっていた可能性がある。ボトルはパコパンパ II 期でも補修の痕跡が確認されていない。

		粗製土器			精製土器						器形計
		PCII Alisado	PCII Tosco	PCII Rojo Pintado	PCII Pulido	PCII Inciso Fino	PCII Linea Bruñida	PCII Máscara	Gris Puliso	Rojo sobre Anaranjado	
鉢	外傾鉢	2	1	0	0	0	0	−	0	0	3
	外反鉢	−	−	−	−	−	−	−	0	−	0
	半球形鉢	0	−	−	0	−	−	−	0	0	0
	開口半球形鉢	1	1	1	2	2	1	−	0	0	8
	外湾平底鉢	−	−	−	0	−	−	0	0	−	0
	朝顔鉢	−	−	−	0	−	−	−	−	−	0
	その他鉢	2	0	0	0	0	3	0	0	0	5
壺	短頸壺	3	0	0	0	−	−	0	−	0	3
	無頸壺	0	0	−	−	−	−	0	−	−	0
	その他壺	1	0	0	−	−	−	0	−	0	1
	水差し形	−	−	−	0	−	−	−	−	−	0
ボトル	ボトル	−	−	−	0	−	−	−	0	0	0
その他	高杯	0	0	−	−	−	−	−	−	−	0
	不明	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
タイプ計		11	2	1	2	2	4	0	0	0	22

表 2 パコパンパ II 期の補修孔を持つ土器（「−」は該当するタイプ／器形が存在しないもの）

5．カピーヤ遺跡より出土した補修孔を持つ土器

カピーヤ遺跡はパコパンパ遺跡の約 300m 東に位置しており、1970 年代にダニエル・モラーレスによって発掘調査が実施された［Morales 1998］。2015 年には先述の共同調査プロジェクトによって発掘調査が実施され、パコパンパ I 期の建築が検出された。この時期の建築はパコパンパ遺跡複合の一部と考えられ、同一社会集団の活動の痕跡と想定される。出土土器のタイプ構成はパコパンパ遺跡と同様であるため、カピーヤ遺跡から出土したパコパンパ I 期の土器の分類はパコパンパ遺跡の分類に準じた。一方でパコパンパ II 期の建築は確認されていないものの、パコパンパ II 期末のものと考えられる、カピーヤ土器複合と名づけた土器群が出土している。この土器群は、パコパンパ遺跡では方形半地下式広場を破壊した層など一部でのみ出土している。

カピーヤ遺跡からは、パコパンパ I 期 4 点、パコパンパ II 期末のカピーヤ土器複合 6 点の計 10 点の補修孔を持つ土器が確認されている。サンプル数が少ないため技術的な相関関係の分析はしないが、タイプや器形で見ると、パコパンパ I 期では、PCI Inciso Tosco が 3 点、PCI Pulido が 1 点で、全て外傾鉢であった（図 8 左）。カピーヤ土器複合の補修はすべて開口半球形鉢で、うち 2 点は同一個体で接合が可能なものである（図 8 右、上段中）。パコパンパ I 期の穿孔技術はパコパンパ遺跡と同様であるが、カピーヤ土器複合の補修孔は外径と内径の差が 1mm の場合もあり、穿孔具が変化した可能性がある。

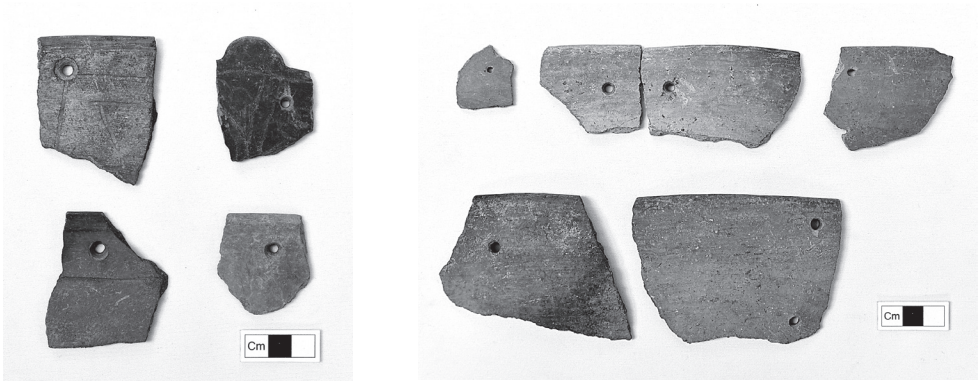


図 8 補修孔を持つ土器片（左：パコパンパⅠ期、右：カピーヤ土器複合）

6．考察

パコパンパ遺跡およびカピーヤ遺跡の分析から、現段階で以下の結果が得られた。

① パコパンパⅠ期からパコパンパⅡ期にかけて穿孔具の顕著な変化は見られない。しかしパコパンパⅡ期に器壁厚と穿孔径、割れ口からの距離に相関性が見られるようになり、パコパンパⅠ期よりも作業手順が整備されたと考えられる。タイプや器形による穿孔技術の違いは見られず、審美的要因は重要視されなかったと考えられる。

② パコパンパⅡ期末のカピーヤ土器複合では、穿孔具が変化した可能性がある。

③ パコパンパⅠ期、パコパンパⅡ期両時期で精製土器、粗製土器に関わらず補修行為は行われた。

④ 精製土器の中でも補修行為が見られないタイプがあり、精製土器・粗製土器の区分ではなく、精製土器内のタイプの違いによって補修の選択がされていた可能性がある。

⑤ 補修されるタイプであっても、無頸壺や墓に副葬される器形には補修行為が見られない。

これらの分析結果をふまえ、パコパンパ社会での土器補修の背景にどのような理由が考えられるかの見通しを示したい。先行研究では、補修される土器／補修されない土器の区別が生じる理由として、経済的状況、土器作りシーズン、用途差、価値体系が挙げられていた。またそれらが地域によって異なっている可能性があることも指摘されている。要因のうち経済的状況は、ギリシャ都市国家の崩壊と連動した危機的状況下で、補修する土器の量やタイプが増加したとするものである［Guldager Bilde and Handberg 2012］。パコパンパⅠ期からパコパンパⅡ期にかけては、建築、工芸品製作、儀礼における変化こそあれ、停滞を想起させる証拠は認められていないため、それ以外の 3 つの要因について考察したい。

一つ目の土器作りシーズンは、新しい土器を作るまでの間、壊れた土器を補修して凌ごうとしたとするものである。パコパンパ遺跡周辺は今日でも雨季と乾季があるため、当時の土器作りが季節的であった可能性はあるが、分析結果から補修される土器と補修されない土器にある程度の違いが見られることから、これが決定的な理由だったとまでは断定できない。ただし、主としてほかの要因があり、さらに土器作りシーズンが関係するということはありうる。

二つ目の用途に関しては、液体を入れる機能が想定され、かつほかの用途に転用ができない器形に関しては

補修されないというものである［藤村 1984］。たしかに、パコパンパ社会で補修の痕跡が認められなかったボトル土器は、その形状から液体を入れたと想定される器形である。しかし海岸部では、鐙形ボトルの口縁部付近に補修孔が開けられている例が報告されており［鶴見 1998:22］、口縁部付近の割れ程度であれば、機能的には補修して使い続けても支障がなかったということになる。したがって、パコパンパ社会でボトルが補修されないことの背景として、機能的側面以外の理由を見出す必要がある。一方で無頸壺が補修されないのは、据え置いて使っていたために破損する機会が少なかった可能性があるほか、その形状や用途から修復して使い続けることが難しかったためとも考えられる。

三つ目の価値体系については、当該社会が認識していたと想定される価値によって、補修の選択が異なるというものである。アンデス以外の地域では、象徴的価値の高いものや装飾性が高いため投下労働力が大きく、価値があるとみなされるもの、入手が容易でなく経済的な価値が高い搬入土器など、いずれも価値が高いと見なされる土器が補修されるとの考察が得られている。しかしパコパンパ遺跡の場合、投下労働力を基準とした精製土器・粗製土器の区別で見た場合、補修行為に違いは見られない。一方で同じ精製土器に区分されるタイプであっても、補修されるタイプと補修されないタイプの違いが見られた。ただしこの場合、補修されないタイプである PCI Pintado Post-cocción や PCI Polícromo は、刻線での装飾以外にも複数の顔料を準備する必要のあるタイプであり、PCII Máscara は複数の技術を複雑に組み合わせて装飾するものである。したがってこれらのタイプの投下労働力は、他の精製土器タイプと比較してむしろ大きいといえる。また搬入品と見られる Gris Pulido や Rojo sobre Anaranjado にも補修行為は確認されていない。さらにボトルは墓に副葬される場合もあるなど、象徴的価値を十分に持っていたと考えられる土器である。このことからパコパンパ遺跡では、補修される土器／補修されない土器の選択に先行研究の例とは逆の価値体系の要因が働き、補修されない土器は、いったん壊れたら使い続けることができない土器として捉えられていた可能性がある。

このように、パコパンパ遺跡における補修される土器／補修されない土器の選択は、価値体系が関係している可能性が高く、それも従来の解釈とは異なり、価値が高いと考えられる土器が補修されないことがわかった。地域的な違いに関しては、アンデス形成期での先行研究がない現段階では詳細に見ていくことができないが、ボトルの例を挙げても補修の選択に関して地域差があった可能性が考えられる。今後はパコパンパ遺跡でのサンプル数を増やすとともに、博物館や刊行物の資料を集成して他地域や異なる時期との比較に関しても検討したい。

【謝辞】

この研究は、科学研究費補助金 基盤研究（S）平成 23～27 年度「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（研究代表者：関雄二、課題番号：23222003）および総合研究大学院大学 平成 25 年度「卓越した大学院拠点形成支援補助金」事業、同大学 平成 26 年度「文化科学研究科学生派遣」事業によって実現した。拙稿を丁寧に読んでいただき、有益なコメントをくださった査読者の方々にお礼申し上げる。

註

（註 1）　このほか、報告写真の中に補修孔と思われる穿孔を持つ土器片が写りこんでいることがあるが、いずれにせよ体系的な研究はされていない。

（註 2）　従来の機能を維持するための補修では、複数工程をかけてより丁寧な補修となると示唆している。なお、及川自身の分類は、先行研究を参照に補修孔研究の今後の課題を整理するために試みられた

ものである。

（註3） 小林達雄は自身が定義する様式について、雰囲気が共通する型式を越えたまとまりであると説明している。小林はこれを共通する製作流儀によるものであり、集団の活動領域の指標となるものであると考えている［小林1994］。

（註4） ラルコ・オイレ自身はこの調査の報告を残していないが、クエバ［1982:11］、カウリケ［1975:13］などによる言及がある。

（註5） なお焼成前の穿孔には、壺の把手部分に開けられたものや、高杯の脚部に開けられたもの、鉢の胴部にざるのように連続的に開けられたものがある。

（註6） これまでに確認された補修孔を持つ土器の量である。パコパンパ遺跡では、発掘調査によって約20トンの土器が収集されており、今後の分析によってサンプル数は増加する可能性がある。

（註7） 他地域との比較のために、一部胎土を属性に含む場合がある。

（註8） タイプはすでに述べたとおり、色、表面調整、装飾要素の順に階層化した体系に沿って設けてあるが、地の色の違いを除けば表面調整、装飾要素は同じである場合が多い。単色土器の補修孔に関しては、地の色による差は見られなかったため、本論文では表面調整、装飾要素の階層でまとめた結果を提示している。ただし、胎土が極めて特殊であるGris PulidoはPCII Pulidoの中に含んでいない。

（註9） PCI Pintado Post-cocción en Zonaのことであるが、名称が長く煩雑になるため、以後PCI Pintado Post-cocciónと記す。

（註10） 筆者の土器分析によって、パコパンパI期には外傾鉢の量が多いことが判明している。

参照文献

Cleal, R.

1988 The Occurrence of Drilled Holes in Later Neolithic Pottery. *Oxford Journal of Archaeology* 7(2):139-145.

Cueva, N.

1982 *Pacopampa*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.

Guldager Bilde, P. and S. Handberg

2012 Ancient Repairs on Pottery from Olbia Pontica. *American Journal of Archaeology* 116(3):461-481.

Dooijes, R. and O. P. Nieuwenhuyse

2007 Ancient Repairs: Techniques and Social Meaning. *Konservieren oder Restaurieren: Die Restaurierung Griechischer Vasen von der Antike Bis Heute*, edited by M. Bentz and U. Kästner, pp.17-22, C. H. Beck, Munich.

2009 Ancient Repairs in Archaeological Research: A Near Eastern Perspective. In *Holding It All Together: Ancient and Modern Approaches to Joining, Repair and Consolidation*, edited by J. Ambers, pp.8-12, Archetype Publications, London.

Elston, M.

1990 Ancient Repairs of Greek Vases in the J. Paul Getty Museum. *The J. Paul Getty Museum Journal* 18:53-68.

藤村東男

1984 「補修孔」 『縄文土器の知識2 中・後・晩期』 pp.91-96、東京美術。

Fung, R. P.

1975 Excavaciones en Pacopampa, Cajamarca. *Revista del Museo Nacional* 41:128-207.

Kaulicke, P.

1975 *Pandanche: Un Caso del Formativo en los Andes de Cajamarca*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.

小林達雄

1977 「土器の補修」 『日本原始美術体系 1 縄文土器』 pp.162-164、講談社。

1994 「土器と集団」 『季刊考古学』 48:14-16。

Lawall, M. L. and J. Lund

2011 Introduction. *Pottery in the Archaeological Record: Greece and Beyond*, edited by M. L. Lawall and J. Lund, pp.7-9, Aarhus University Press, Aarhus.

松本雄一

2013 「神殿における儀礼と廃棄―中央アンデス 形成期の事例から―」 『年報人類学研究』 3:1-41。

Morales, D.

1980 *El Dios Felino en Pacopampa*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.

1998 Investigaciones arqueológicas en Pacopampa, departamento de Cajamarca. *Boletín de Arqueología PUCP* 2:113-126.

及川良彦

2008 「土器の補修・穿孔」 『総覧 縄文土器』（小林達雄編） pp.1021-1024、アム・プロモーション。

Roddick, A. P.

2009 *Communities of Pottery Production and Consumption on the Taraco Peninsula, Bolivia*. Ph.D. Dissertation, University of California, Berkeley.

Rosas, H. and R. Shady S.

1970 *Pacopampa: Un Centro Formativo en la Sierra*, *Nor-peruana*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.

Seki, Y.

2014 La diversidad del poder en la sociedad del Período Formativo: Una perspectiva desde la sierra norte. In *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo* (Senri Ethnological Studies 89), edited by Y. Seki, pp.175-200, National Museum of Ethnology, Osaka.

Senior, L. M.

1995 The Estimation of Prehistoric Values: Cracked Pot Ideas in Archaeology. In *Expanding Archaeology*, edited by J. Skibo, W. Walker and A. Nielsen, pp.92-110, University of Utah Press, Salt Lake City.

杉原荘介・芹沢長介

1957 「土器口辺部の補修孔について」 『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』明治大学文学部研究報告考古学第二冊 pp.83-84、明治大学文学研究所。

South, S.

1968 Archaeological Evidence of Pottery Repairing. *The Conference on Historic Site Archaeology Papers 1967* 2(1):62-71.

菅谷通保

1984 「土器の補修について」 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書―人工遺物・総括編―』（埼玉県立博物館

編） p.803、埼玉県教育委員会。

Tello, J. C.

1960 *Chavín: Cultura Matriz de la Civilización Andina*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.

鳥浜貝塚研究グループ

1979 「補修孔にヒモの残る土器」 『鳥浜貝塚―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査 1―』 p.36、福井県教育委員会。

鶴見英成

1998 『鐙型ボトル成形プロセスから見たペルー形成期社会の展開』 東京大学大学院提出修士論文。

原 稿 受 領 日 2016 年 5 月 20 日
原稿採択決定日 2016 年 9 月 16 日